

原著論文

「韓国武士道」花郎道の創造と展開

朴 周鳳*

“Korean Bushido” invention and development of Hwarang-do

JooBong Park

Abstract

In South Korea, the image of Hwarang (花郎) which was symbolized as of military spirit, was reconstructed during the Japanese colonial period. At that time, "Hwarang-do" (花郎道) was created as a coined term for expressing that the spirituality of the Korean ethnics and Japanese "Bushido" were the same.

Although this term was created for the Korean, the Japanese were mainly involved in the process of creating this term as a colonial ruler. In the Japanese colonial policy, they intended to assimilate Korean into the Japanese way of thinking that for practicing the concept which was Japan and Korea was one body under the slogan of "Naisen-Ittai" (内鮮一体). In that context, the Japanese sought common mentality in Korean Hwarang and Japanese Bushido and by the reason of that both has the same belief, they regarded Hwarang was Korean Bushido. And this concept "Hwarang is Korean Bushido" was spread throughout the Korean society under the Japanese hegemony.

Despite Japanese intentions, Hwarang was also used for expressing the anti-Japanese sentiment and then "Hwarang-do" was shifted to be a Korean spiritual pillar to oppose Japanese hegemony.

After South Korea became independent, the definitions of Hwarang and Hwarang-do were reconstructed to be South Korean indigenous spiritual cultures during the process that Korean government forced to remove Japanese colonial culture from their society. As a result, "Hwarang-do" became national culture and was widely used in many fields like physical education.

Key word: Hwarang, Hwarang-do, Bushido

抄 録

韓国において尚武精神の表象とする花郎のイメージは日本の植民地期に再構成されたものであった。そして、朝鮮民族の民族精神と日本の武士道が同一であることを示すために「花郎道」が造語として生まれた。

しかし、このような一連の創造過程は植民側の朝鮮民族によるものではなく、支配側であった日本が創り上げたものであった。日本は「内鮮一体」とする植民地政策を実施するために朝鮮民族と日本民族

* 早稲田大学スポーツ科学研究センター

との同一化を図り、その民族的共通点を花郎精神と武士道精神から求めた。こうした精神的同質性は日本の軍国主義と結びつき、花郎を朝鮮の武士道として定立させた。そして、植民社会という権力関係の優位によって、朝鮮社会に広がった。

だが、一方的な力関係によって使われるはずであった花郎は、支配側とは異なった意味合いで反日の朝鮮側にも使われ、花郎道は朝鮮民族の民族精神の支柱となり、日本への対抗意識を示す言葉として流用された。その結果、独立後に日本の植民残存文化が強制的に取り除かれる中で、花郎と花郎道も日本との関係が取り除かれ、韓国固有の精神文化として再構成された。その花郎道と結びつく精神文化は国民文化となり、政治のみならず体育の側面まで幅広く利用された。

キーワード：花郎、花郎道、武士道

はじめに

「花郎」は朝鮮半島の歴史において、新羅時代に存在した青少年修養団体のことを言う。

この花郎（ハングル読みではファラン）について、韓国の「国立国語院」¹⁾の定義によると、「(1) 歴史：新羅時代に設けられた青少年の民間修養団体。門閥と学識がある外見がきちんとしている人で作られ、心身の鍛練と社会の善導を理念とした。(2) 歴史：花郎の指導者＝国仙，花主」とされている。そして、花郎と関連する用語として、「花郎徒：新羅の時に設けられた花郎の群れ—国仙徒，郎徒，風流徒，風月徒，香徒」と「花郎道：新羅の時，花郎が守るべき道理—儒，佛，仙の三教，三徳，五戒を信条とした」がある。

上記したようにさまざまな定義が存在するところではあるが、一般的に花郎は現在の韓国において国のため戦った勇敢な姿が強調されている。そして、その姿は韓民族の忠義精神を表わすものとして扱われている。このような花郎の存在は学校教育にも取り入れられ、初等学校から始まる教科書に載せられており、また学術においても研究対象として多くの研究が行われている。その研究内容は、花郎の史的考察，思想体系，宗教との関係，教育的価値と意味などがある。また、体育・スポ

ーツの研究でも花郎が取り上げられているが、焦眉の課題とはなっていない²⁾。

一方で、このように花郎は現在の韓国社会に深く定着しており、花郎精神は韓民族の民族精神となっているが、花郎が韓民族と結びつけて考えられるようになったのは近代に入ってからである。実は本研究で検討する「花郎道」は花郎の道理を示す概念であるが、日本の植民地期から現われた言葉である。元々日常的に「道」を思想的意味として使う習慣がなかった韓国において、このことは重大な意義をもっていると考えられる。

崔在穆³⁾によれば日本の植民地期に花郎と言う概念が韓半島のいわゆる「武士」として評価され、彼らの精神が日本の「武士道」と重ね合わされて「花郎道」という造語が生まれたことを指摘している。そして、その言葉は朝鮮総督府の植民地政策の中で軍国主義と結びつき朝鮮民族を戦地に送り出すためのツールとして利用されていた点を指摘しており、花郎道という概念が朝鮮民族にとって、自らのアイデンティティの維持と日本人への同化のプロセスの狭間で重要な位置にあったことが論じられている。

あわせて崔は第二次世界大戦後に発足した韓国新政権は国家の正統性を主張するために政局運営に積極的にこの語を用いた点を指摘している。この指摘は、花郎道が独立後の半島で韓国オリジナ

ルの概念として認識され利用している人々へ、その概念が日本植民地期に由来するいわば屈辱的な事実であることを指摘するものであり、大きなセンセーションを起す研究となった。

こうしたプロセスを経た花郎道は、戦後韓国の体育・スポーツの場面でも用いられることとなった。朝鮮は韓国として新たに建国したものの、対外的に北朝鮮との政治的対立や国内的に経済成長を目指している複雑な状況の中で、新政府は強い国民精神の原点を花郎道に求めた。そして、その際体育精神は花郎道精神の発露として用いられ、花郎道は韓民族のアイデンティティを表わすものとなっていった。

本研究は「韓国武士道」を意味する造語として生まれた「花郎道」について、それが日本という敵国によって創造され使われた言葉であるにもかかわらず、日本的要素を排除する傾向の強かった独立後の韓国新政府がその言葉を改めて利用した事実を踏まえた上で、国家イデオロギーや民族主義にとどまらず、独立後の体育・スポーツ場面においても一つの精神文化として流用され定着してきたことについての考察を試みるものである。

1. 新羅花郎の誕生とそのイメージの形成

花郎の誕生については『三国史記』⁴⁾で確認できる。『三国史記』の「新羅本紀 眞興王」によると、花郎という制度は優れた人材を朝廷に推薦するため設けられたものであった⁵⁾。そして、多くの秀だった花郎による軍事的行動のため、自分の命を惜しまない勇敢な士官、兵士のイメージが付与されている⁶⁾。

また、花郎のイメージに強い影響を与えたのは、花郎の倫理道徳として知られている「世俗五戒」である。これは『三国遺史』に記されているもので僧侶の「圓光法師」が花郎の倫理的徳目として伝えたとされている。「事君以忠」、「事親以孝」、

「交友有信」、「臨戦無退」、「殺生有沢」とする五戒を伝えている。

こうして圓光法師が守るべき道理として伝えたとされる世俗五戒には、特に「事君以忠」、「臨戦無退」の「忠」に対する徳目が取り上げられ、花郎が軍事的性格を強調するものとして用いられている⁷⁾。

2. 植民地期における花郎道の創造

1) 植民地での花郎の再定立背景

以上のような軍事的集団としての花郎のイメージは、実は1900年代以後日本の植民地時代に創られたものである。

「1910年8月、日韓併合条約によって植民地になった朝鮮に日本は総督府を置き、植民地統治を開始した。総督は天皇に直隷し、朝鮮における統帥権とともに、法律にかわる命令（制令）を発することのできる包括的な支配権をもった。日本の軍部は朝鮮植民地化の政治過程を通じて、また一方で熾烈な民族闘争の弾圧を梃としながら独自の政治勢力化をなしていくが、そのことは、それだけ朝鮮の統治を必然的に軍事的色彩の強いものとした。軍隊の憲兵が警察の要職を兼ねて警察権を指揮し、憲兵は治安の主力となった。朝鮮人の結社、政治的集会はもとより、屋外における多数の集まりまで禁止し、朝鮮文字の新聞の刊行は許可しなかった。官吏や教員は制服・着剣し、こうして社会のあらゆる場面で専ら威圧によって統治した⁸⁾。

こうしたいわゆる「武断統治」は1919年まで続き、朝鮮国民の自由は抑制された。だが、第一次世界大戦後、アメリカのウィルソン大統領が提唱した「民族自決主義」による民族自決意識が高まり、総督府の植民地弾圧による不満は3・1独立運動という形で現われた。この独立運動によって武力による植民地統治に対する批判世論が日本

国内でも相次ぎ、武断統治による朝鮮支配は不可能であると判断した総督府は名目上、「武断統治」から「文化統治」へ転換させた⁹⁾。

第3代目の朝鮮総督となった斎藤実(海軍大将: 1919～1927 在任)は、新しい植民地政策として「文化の発達と民力の忠実」というスローガンを掲げ、文官出身の総督の任命、憲兵警察制度から普通警察制度への変更、朝鮮人官吏の任命、言論・集会・出版の保障、朝鮮の文化と伝統の尊重、国民生活の安定などを図り、朝鮮民族の不満を弱めようとした。こうした文化政治によって「東亜日報」、「朝鮮日報」などの民間紙の刊行が許可され、ある程度の言論の自由が与えられた¹⁰⁾。また、「日鮮同祖論」が強調され、朝鮮統治の根本として「一視同仁」、「日鮮同治」、「日鮮融和」、「共存共栄」の実現が宣言された¹¹⁾。

こうした植民地政策のもとで花郎は注目されるようになった。花郎は朝鮮民族の精神文化として見なされ、その民族性を表わすものとして扱われた。総督府は花郎を日本文化と同等の精神性として評価し、朝鮮民族と日本民族を同一化させる「日鮮同祖論」的論理のもとで花郎を取り上げたのである。

韓国の歴史において軍事的側面から偉人と呼ばれる人たちの多くは対外(日本や中国)の戦争において功績をあげた人である。それに対して花郎は対内の戦争で高句麗、百済を降し、韓半島を統一して、その国内統一に力を尽くしたのである。

こうした対外と対内の関係、すなわち新羅が国内を統一して他の民族を同一化させたことが民族のシンボルとして、総督府にとっては「内鮮同祖論」の政策を裏付ける根拠として使いやすいテーマであったことが考えられる。

2) 支配側による花郎の研究と花郎道の創造

日本人学者による花郎の研究は1900年代以後から見られる。以下の5点が主な研究であるが、

全てが総督府の「内鮮一体」政策(1919年)以後書かれたものである。

今村 鞆(1928)「新羅花郎を論ず」、『朝鮮』、第19巻 第161号

池内 宏(1929)「新羅人の武士精神について」、『史学雑誌』、第40編 第8号

同上(1936)「新羅の花郎について」、『東洋学報』、第24巻 第1号

鮎貝房之進(1932)「花郎攷」、『雑攷』第4輯(鮎貝房之進(1973)『雑攷 花郎攷・白丁攷・奴婢攷』国書刊行会、所収)

三品彰英(1943)『新羅花郎の研究』、三省堂

今村と池内の研究は『三国史記』や『三国遺史』を根本資料として花郎を把握した。主に花郎が創られた新羅時代を中心に花郎の活躍に焦点を当て花郎について分析を行った。その中で池内は1929年の「新羅人の武士精神について」で、『三国史記』に記されている盤屈と官昌の戦での死において、その親であった欽春と品日は息子の命より国益を優先とし、盤屈と官昌も命を惜しまず国のために名誉ある死を選んだ記事に対して、

「我が子の死を見るのを、我れ自ら死するよりもつらく感ずるのは、人間の情である。欽春や品日が其のつらさを忍んだのは、我が国の熊谷直実が戦場に於いて絶えず子息直家をかばったといふのと、正反対であるが、其の精神は、源為朝の言として伝えられた『坂東武者の習、大將軍の前にては、親死、子討るれども、顧ず、弥が上に死重りて戦とぞ聞』と相通ずるものがある」¹²⁾

と花郎が戦に臨む姿勢を日本の板東武者の習いと同様に高く評価した。だが、花郎の精神的要素を武士道的に扱いながらもそれに「道」をつけることはなかった。また1936年の「新羅の花郎について」では、花郎について「新羅の武士道を代表する新羅武士の花形であった。これを推尊し、これに率いられている一群の徒衆は、平時に於い

ては修養団であり、戦時に於いては戦士団であった¹³⁾と述べ、花郎が新羅の「武士道」を継承する存在であると捉えた。

三品も『新羅花郎の研究』で花郎の戦士团的性格について述べていた。「花郎集団の機能中、国家的に最も重大な意義を持つ点は、それが青年戦士の集会であって、非常的には彼らは国防の第一線に立ち、常に抜群の武功を収めたことであって、この点こそ新羅の異常な国家的発展の過程において看過することのできない民俗である」¹⁴⁾とし「男子組合の軍事的機能は、一般問題としても男子組合の本質にかかわるものであり、男子組合成立の究明に当ってこの軍事的機能にその中心を置こうとする論者も少なくない」¹⁵⁾と述べた。

こうした研究が行われていた中で、「花郎道」という語を初めて用いた論文は、鮎貝房之進の「花郎攷」(1932)である。鮎貝は日本民族の優越性と同等なるものを新羅の花郎に認め、「花郎気質」なるものを花郎道と称した。「花郎攷」第8章、「新羅花郎気質は何に原因せしか」に「是は新羅統一前約1世紀間の花郎研究に就きて、最も主要なる問題なり」¹⁶⁾と問題の重要性を示した上、「如何となるに此の半島民族が有史以来約三千年、前後比類無き勇将烈士の輩出せるは勿論国民忠義觀念の旺盛なる時代は、此の約一世紀間の花郎時代の右に出る時代無く、而して此の比類無き花郎気質なるものは決して偶然の発露にあらず」¹⁷⁾と高く評価した。そして、花郎道は儒佛道の三教の習合であると言うのは表面の修飾であり、実は新羅固有の民族性の発露であり、その民族性は「臨戦無退」「見義軽生」のように勇敢であったと述べた。

鮎貝は其上、総督府が行っていた同一化政策理念に基づいて、花郎また新羅民族の割合の多くを占めているのが大和民族すなわち日本民族であると主張した。鮎貝はいう。

「『花郎道』は新羅の固有民族性の発露なりとは云へ、其民族は何れの民族の血を受けたるものと云ふ問題なるが、新羅即ち今の慶尚道の地には古来朝鮮民族(箕準に従って南下せる民族)漢民族(秦の亡人等)等の移住ありしは古史冊の明記しある通りなるが、最も主要なる民族としては、大和民族たりしことは、彼我の歴史により証拠立てらるゝところにして、今贅言を要せざるところなりとす」¹⁸⁾

と、さまざまな変化の中でも大和民族の気質はある時代まで持続されてきて、新羅人による忠義の花郎気質は高句麗や百済人の精神文化とは異なり、その理由は大和民族の血が受けつがれているからであると新羅民族と日本民族を同一視した。鮎貝はいう。

「他の氏族との融和上地理上の関係ありて或程度の接化と変化は受けたるべきも、大和民族の『義侠にして生を軽んずる』と云ふ気質は或時代までは持続されしを推測さる……自ら進んで忠義の爲めに死を撰びたる『花郎気質』の人ありて、其志操麗濟人と類を異にせしは、必竟大和民族の血を受け居るが爲めなり」¹⁹⁾

さらに鮎貝は、朝鮮時代の『芝峰類説』(1614)に記されている、「今倭奴の俗も同様なるが、是れ徒に習尚の然るのみならんや、形賞を以つて之を駡使せしに在るのみ、若し刑必罰せず。賞信せずんば、何を以つて国の爲めんや(ママ)」²⁰⁾とする文章を引用し、新羅人と倭人は刑賞があるから国のために戦ったとする主張に対して、ある程度同感であるが、必ずしも刑賞が原因ではなく、大和民族の「以死為榮」の精神が自然的な民族性の発露であるように、花郎道もそれと同様であると次のように述べた。

「花郎道と倭俗と同様なるに想到せしは、我々と同感なるも、形賞必信を其原因と為せ

るは、観察の透徹せざりしものと云ふべし。眞興王が爵賞を以つて之を奨励せしは実事なるも、大和民族の『以死為榮』は爵賞の厚き為にあらず。民族性の発露にて、自然の習尚なり。花郎道亦民族性の発露なり」²¹⁾

こうして日本人研究者による花郎の研究は、その多くが朝鮮と日本の同質性を主張するものであった。新羅の古きものであった花郎を自分たちの武士道と結びつけ解釈し、新しい意味合いで定立させた。そして花郎道とする精神文化を創り上げたのであった。

その後、1937年に勃発した「日中戦争」によって、朝鮮に対する総督府の軍事的な装置もより強められるようになり、朝鮮人を戦争に動員する「朝鮮人志願兵制度」などが設けられた。そのため朝鮮人の武士精神が強調されるようになり、花郎道は朝鮮人の武士道として用いられた。こうした軍国主義的思想と絡まった花郎精神は「内鮮一体」精神として、太平洋戦争が始まった1940年から一層強く強調された。

花郎を軍事的でその精神を日本と同一視した思想は教育の現場でも現われた。白神壽吉は「紀元二千六百年記念論文」(1940)で、「内鮮一体精神新羅花郎道」という題名を前面に出した。新羅の盡忠報国の大精神は日本精神、大和魂と同じものとし、半島民衆に皇国臣民としての愛国の発露である志願兵制度が実施されたと述べ、朝鮮人も日本人と同様に天皇の民であることを強調した。その上、日本人と同様に国のため忠誠心を持つべきであることを述べた²²⁾。

太平洋戦争が終わる際であった1944年には花郎は戦争との関わりは一層強くなった。花郎精神は戦争に臨む尚武精神として強調され朝鮮人に伝えられた。総督府の機関紙であった「毎日新報」(1944. 3. 2)には三品彰英が書いた「新羅の花郎制度」が載せられ、そこには「澆刺な尚武精神

この精神を米英の殲滅にいかせよ」という表題が大きく書かれていた。また1945年1月12日には、「特攻精神と花郎道 臨戦無退、気魄で最後の勝利を獲得」と、花郎道は戦争に臨む精神として直結された。

3) 朝鮮民族による戦争動員活動と花郎道

花郎道は武士道的解釈と共に、朝鮮の人々を戦争に出兵させる手段としても用いられた。

以下は戦後、日本に協力した新日派の朝鮮民族に対して調査した「反民特委調査記録」²³⁾(1948)の記録である。朝鮮総督府中枢院委員であった曹乗相は戦争動員の講演の中で、花郎道を用いていた。

①朝鮮学生を戦争に動員するため開かれた講演

「日本が朝鮮学生の出征を希求するのは、我々も日本国民と同等する意味」

「我々は花郎精神があった時に、国勢が最も旺盛した。武なき民族は決して発展できないので、ぜひこうした機会をもって武を練磨するべきである」²⁴⁾

また、毎日新報(総督府の機関紙)の忠北支部長であった洪淳副も曹乗相と同様意味で、花郎道を用いていた。

閔亨植の証言、作成日1949年5月21日

「欧州が強かった原因は騎士道があったからで、日本が強くなった原因は武士道があったからで、昔、新羅は強かった原因は花郎道があったからであり、我々が今大東亜戦争で勝利するには戦意昂揚が必要であり、戦意昂揚は昔の花郎道精神を発揮なので、花郎道精神を発揮して戦意を昂揚させ大東亜戦争を勝利に導く」²⁵⁾

鄭雲昇の証言、作成日1949年6月17日

「朝鮮歴史の一例として、花郎道、高麗朝の状況、新羅の武士道などを話して、朝鮮民族意識を鼓吹

させると言った」²⁶⁾

②戦争への出兵を慫慂した文献「新日派関連文献」

中枢院の顧問であった韓相龍は、1941年5月16日に徴兵制実施記念大講演で講演し、1943年には論文「立派な軍人になれ」で、花郎精神を軍国精神と結びつけ軍に進めることを論じた。

「……振り替えてみると、朝鮮にも昔には立派な武士精神があって、新羅時代の花郎精神は内地の武士道に匹敵するものの、軍に進めた者は武功を立てなくて戻ることを喜ばず、それ以上不名誉であるものはないと思ったことは、日本の軍国精神は、はるかに昔の新羅にも流れていた」²⁷⁾

また、1941年6月1日雑誌「三千里」には柳子厚が「花郎と風流」という題名で支援兵を送ることを進めていた記事がある。

「新羅の花郎道の精神なくでは大東亜の新機軸の新生活を獲得することはできない。それ故、この花郎風流を復活させ花郎道の為国一死の義気を昂揚してほしい。私は支援兵を送る意味にはいつでも新羅花郎の精神を発揮することに意義を求めた」²⁸⁾

そして、小説家の張赫宙は1943年11月11日「花郎徒精神の再現、若い学徒の行く道は1つ」で、「朝鮮学徒に特別志願兵制が実施されたことに感激すると共に、朝鮮学徒全員が総決起することを願う宿望が私の心を揺らした」²⁹⁾と述べ、出兵を喜んでいた。

このように花郎道は、日本と朝鮮を同化させる「内鮮一体」の内政を越え、戦争に協力を強要するために必要な精神的母体にまで展開した。

3. 反日派による花郎道の受容

花郎は支配側であった日本の植民地政策によって再構成されて利用されたが、植民側であった朝

鮮にとってもその存在は民族精神として受容された。

植民地期には朝鮮人による花郎の研究も行われており、安自山の『朝鮮武士英雄伝』(1919)では花郎を朝鮮の武士道を称し、花郎武士という用語が用いられた。また申采浩による『朝鮮上古史』(1931)では、花郎は高句麗の「ソンベ」制度から借りたものであり、撃剣、騎馬、シルムなどの武芸を練磨し、国難の時には自分の命を惜しまず犠牲にしたのはソンベと同じであると述べた。しかし、これら朝鮮人の研究では、花郎の精神的要素を重要としながらも花郎道という語は使われなかった。

朝鮮総督府がいわゆる文化政治を標榜したことによって1920年4月1日に創刊が許可された「東亜日報」は、植民地期において朝鮮民衆の立場を代弁することを目的とした。「朝鮮民衆の表現機関として自任する、民主主義を支持する、文化主義を提唱する」を社是にして民族主義側が展開した民族運動と深い関わりを持ちながら活動を続けていた。東亜日報は、創刊当時から平壤の万歳事件、日本皇室の三種神器批判、1936年ベルリンオリンピック・マラソンの優勝者である孫基禎の写真にある日ノ丸を削除して掲載などの件で、無期停刊4回、発売禁止63回、押収489回、記事削除2423回の弾圧を受けていた。「東亜日報」、反日のジャーナリズムであった³⁰⁾。

こうした反日主義をもとにした東亜日報にとって花郎はいかなる存在であっただろうか。東亜日報には創刊当時から花郎に関する記事が載せられていた。その主な記事の内容は、支配側が使っていた花郎道を武士道とするものではなく、花郎についての歴史的考察を通して、本来それがいかなる意味を持っているのかについて論じられた³¹⁾。

このように花郎についてはたびたび掲載された。近代における花郎の発露が朝鮮総督府の植民地政策の一環として行われたと考えられる中で、

東亜日報の主張する花郎の意義は植民地政策とは異なり朝鮮民族の民族精神とアイデンティティを求めたものであったと考えられる。そして東亜日報には、花郎という精神的中心軸を立てることで民族精神を鼓吹する狙いもあったと考えられる。

また、鮎貝の研究(1932)以降、「東亜日報」においても花郎道の語は使用されていく。(下線は著者)

1933年1月2日「癸酉と我々の偉人」

「金庚信! 彼はどのような人物であったか? 我々が彼の生涯と思想を知るためには新羅当時の花郎道の道風一般を論じなければならない」

1934年10月26日「朝鮮心と朝鮮色: 朝鮮特有の社会制度」

「……当時の花郎道を目指して儒佛仙の三教を総合したと讃揚したが、今日の科学水準からみると儒佛仙三教の自体が朝鮮のイデオロギー/発展史上の各々の特殊な任務と意義を持っているため花郎道をそのまま讃美するより批判的に理解する必要がある」

1935年12月5日「朝鮮人思想において『アジア的』形態に対して」

「この花郎道は朝鮮的シャーマニズムである」

1939年1月24日「伝統と創造: 花郎制度が内包する現代的意義」

「花郎制度の根本精神は武士道精神であり、花郎道の根本理念は興口を理想として三国統一の目標を達成したのである」

1940年1月1日「臨戦無退の花郎道: 新羅時代尚武精神の権化」

「新羅興国の基礎なる武士道は花郎道である……国家の有事之秋に自進出戦する民間自治の愛国団体が花郎道である……この五つの條目は花郎道の五大綱領であり昔朝鮮の五倫といえるもので、花郎道はこの五つの綱領下で動いた」

このように花郎道は鮎貝以外にも花郎の精神を示す言葉として用いられた。こうして花郎に道

の字をつけて使ったことについては、1931年という日付と関連して考えることができる。鮎貝が「花郎攷」を書いた1931年は日本が満州事変を起こした年と同じである。そして当初花郎道を武士道と結びつけなかった東亜日報が、1939・40年に花郎道を新羅の武士道精神と記した記事は、1938年2月に出された「陸軍特別支援兵令」に伴い、総督府は朝鮮による軍事政策が強まったため朝鮮社会全体が戦争に協力せざるをえなかった状況によると考えられる。太平洋戦争は1941年12月の真珠湾に爆撃をすることによって始まるが、すでに日本はこの満州事変から終戦まで中国と15年間の戦争を続けていた。

こうした状況は「日本社会は軍国主義の色合いを濃くし、政策上も戦いに勝ち抜くための民族精神の高揚や、そのための体力作りが従来よりいっそう強調されることになる。学校体育も必然的に戦時体制に組み込まれ、その目的が国防力の増強と国民精神の涵養に寄与するものとして教科の中でも重視されるようになる。特に武道は滅私奉公の精神を肉体を通じて鍛えられるものとして注目された」³²⁾。

この戦争という状況、そして注目された強い国民精神は、同化政策を開いていた朝鮮に影響を与えて、精神的強さを意味する言葉として道の文字が使用されるようになったと考えられる。その道を花郎に合体させることによって、花郎道は朝鮮民族を表わす意味を持つようになったと考えられる。

その他に「新韓民報」にも「花郎観」(1943. 6.24～7.1, 3回)という記事が載せられ、花郎観は朝鮮民族の固有の独立文化であり護国精神として取り上げている。新聞以外にも1933年に白樂濬が書いた「古朝鮮の国風花郎道はなにか」には、

「臨戦無退の精神

この上に論述した花郎道の精神を一言而蔽之す

ると、臨戦無退であり見義軽生である……世俗五戒が花郎道の精神であり、我々に伝わる国風である」³³⁾

と書かれ、鮎貝と同じ議論が展開されており、新聞と同様に1930年代から花郎道という言葉が用いられたことが確認できる。

植民地における花郎の利用は言論だけにとどまらず、反日運動にも用いられた。1930年代に中国で民族意識を鼓吹することを目的に結社「花郎社」が結成された。これは金徳根が同志20名余りと、新羅の花郎精神を継承、発展して日本からの独立闘争を鼓舞する目的に組織したのであった³⁴⁾。以下の新聞記事の内容から花郎社の様子がうかがえる。

1930年8月6日、「朝鮮日報」

「中國上海の韓人団体である愛国婦人階、興士団、勞兵会、電車公司 韓人親睦会、上海韓人学友会、仁成学校維持会、仁成学校同窓会、仁成学校少年斥候隊、花郎社 丙寅義勇隊 商業會議所など13個団体の代表20名が会集して水害救済会を結成し、愛国婦人会 仁成学校同窓会 花郎社 少年斥候隊の4個団体ことに募捐隊を組織して義捐金を募金することにした」

1934年6月19日付、「在上海 石射總領事 發信 内田外務大臣宛 報告 摘録」

上海 及 同關係 不逞鮮人團體の件

「花郎社（事務所なし）、責任者 金徳根、本人は昭和7年4月30日逮捕、現在朝鮮。

古代花郎の制に倣して民族意識を喚起教養とする目的とする小結社で、平素は民族者幹部間の通信・連絡・送迎・應接に従事しているが、昭和7年4月責任者金徳根の被捕後右補任したとは聞いていない。有名無實の状態である」

1936年2月22日、「東亜日報」

秘社「花郎社」上海佛租界で組織

「李在天（23）は治安維持法違反で21日午前京成地方法院の香川検事から懲役5年を求刑された……被告李在天は13歳のころ親と共に上海に渡り、上海南洋中学で勉強している途中、父兄と親友の感化によって民族運動の促進機関を創るために、昭和4年8月に花郎社という秘密結社を組織した後、上海在留朝鮮人 少年同盟を組織し……」

1936年2月29日、「東亜日報」

「花郎社事件 5年役言渡：上海の少年秘社」

「上海で花郎社と少年同盟という秘密結社を組織し、上海の居留朝鮮人少年に不穏な思想を宣伝した李在天に関する治安維持法違反事件の言渡公判が28日午前京成地方法院刑事部法廷で開廷され、山下裁判長は先日20日入会検事から求刑された通り、被告李在天に懲役5年を言い渡したが、被告は即席で公訴することを言明した」

花郎社は朝鮮の民族意識を表わす言葉として花郎を選んだ。それは日本の「内鮮一体」政策の中で創り上げられた花郎および花郎道が流用されたことを示していると考えられる。花郎社および東亜日報は、日本へ対抗する際の精神的支柱として花郎道を日本側から流用したのであった。

4. 戦後の韓国における花郎道の展開

1) 大韓民国建国と花郎道

1945年8月15日、日本の敗戦によって朝鮮は植民地から独立した。

そして1948年大韓民国政府を樹立する中で、日本の植民地文化を削除することが重要な課題とされた。しかし、植民地期に日本によって再定立された花郎と花郎道は消えることなく新政府にもそのまま使い続けられ、再び韓民族のシンボリックな存在として登場した。

1920年代に朝鮮の独立のために上海で結成された韓国独立党が1945年3月1日に発行した「独立評論」の創刊号には独立評論の任務と目標とし

て、花郎が用いられている。

- 「1. 韓国始祖壇君建国の悠久な独立文化を紹承し、歴代護国した将軍と救民した名相の正輕大臣を發揚拡大するべき。
2. 新羅建国の民族精神を継続体现して花郎文化の高潔耿介な遺風を宣揚するべき」

韓国の初代政権であった李承晩政権は、韓国政府を独立国家として立ち上げる際に必要な民族精神的土台を花郎道に求めた。韓国言論はその民族精神の発露である花郎道を軍と結びつけ韓民族精神として定着させた。

1948年12月16日京郷新聞に戦傷兵を慰問した女宣教部の記事が載せられ、「完治をすると国家と民族のためにまた身をささげると誓ったことに、慰問した人たちも花郎道を継承した国軍の勇敢性に感動して民族愛から沸き出す涙がでた。」また、1949年3月15日東亜日報に「まもなく南北統一、軍は花郎道の精華」という題名での参謀総長放送の記事を載せた。それには、「……一つの国に二つの政府は存在できないことを強調し、我が民族の歴史に輝く花郎道の精神をもって、遠くない将来に統一すべきである……我が国軍は南北に含むすべての武力を花郎道の精神をもって、二度と倭勢の侵略を絶対に許さない永久不便の民主主義国家へ推進すべきである」。そして、1949年5月24日京郷新聞には北朝鮮のテロによって亡くなった10人を「十勇者」と称し、「花郎道の血を受けついで我が国軍の精華であり、祖国の守護神になった十勇者は北韓共匪をびびらせた。我々は十回死んでも、国と民族を売り出した共産主義者と勇氣を持って戦い、十勇者の愛族愛国の精神を受けついでいこう」などの記事が載せられた。

歴史学者であった李瑄根の『花郎道の研究』（1949）は、「学生、青少年の愛国心をかき立てる後世の数々の出来事を花郎精神の発露と認定し

た。国民国家形成のために花郎精神なるものの総体が花郎道として創造し、報国、殉国の犠牲的尚武精神として宣伝」³⁵⁾され、花郎精神を国民精神と結びつける理論的土台になった。そして、花郎の軍事的性格は植民地期と同様に続けられ、1948年には『花郎道系統 朝鮮軍事實鑑』³⁶⁾（以下、『花郎道系統』と略す）が刊行された。

『花郎道系統』は、韓国政府が建国された年に当時国務総理兼国防長官であった李範奭を含めた韓国軍の諸関係者の承認のもとで書かれたもので、韓国軍の歴史的正統性の主張と韓国国民の果たすべき軍事的義務の重要性を強調するものであった。これには韓国軍人の始初を新羅の花郎から求め、新羅花郎道が大きく発展した時期が新羅の全盛時代でもあり、上古の時代から伝わる武勇、礼義、忠義とする三条は現在の軍人精神で、「世俗五戒」の5つの項目を軍人の道理として捉えた。また花郎道のような軍人精神を武士道と称し、昔から伝わるものであると述べた。こうした花郎道を武士道とする論理は植民地期に日本の「内鮮一体」政策および軍国主義によって確立したものであったが、建国後の韓国政府もそれを日本との関係を取り除いて韓国軍の源流なる軍人精神として用いた。

さらにこうした韓国政府による花郎道の唱導は学生層にも軍国主義を徹底する動きとして表われた。1949年4月29日の京郷新聞に「四万学徒参集 中央学徒護国団結成……我々は花郎道の気迫と崇高な3・1精神を継承發揮して、反民族的行動と反国家的ものを徹底的に壊し……」と載せられた。1948年に学生による自治団体として中学校以上の学校で結成された「学徒護国団」は、団体訓練を通して心身を鍛えて、民族意識と愛国心を養うことを目的としたが、実は戦争あるいは戦争に準備するため組織されたものであった。軍隊を模した活動もなされ、例えば行進、山岳訓練などの活動が行われた³⁷⁾。体育・スポーツの場面

においては1949年に「学徒護国団体育大会」が行われ、学徒の愛国思想の涵養と団結力の向上、健全な身体の育成などが目指されたが、背後には韓国政府による学徒の軍人化の思惑が流れていたと考えられる。

1949年7月17日の東亜日報に「祖国防衛に学徒総決起……我々は中国やチェコとは異なる花郎道伝統の白衣民族なので我々を信頼し、武器をくれ」、そして1949年8月9日の京郷新聞に「学徒護国隊特別軍練……花郎道の精神のように心身練磨に精進する学徒護国隊に対して同胞の期待はますます高くなる」との記事が掲載された。これは言い換えれば、朝鮮戦争に向けて韓国政府の主敵が日本から北朝鮮へと替わっていくが、植民地期に朝鮮の学徒を戦争に送るために用いた花郎道の精神は生き続けたのである。

他方で、花郎道は国内的には韓国民の民族精神として用いられた。1949年2月18日の東亜日報には、韓国がUNの承認を得たことを祝う、そしてその任務は果たしたことに「花郎道を宣揚」と高く評価しており、1949年10月10日の京郷新聞には大韓民国政府樹立1周年記念行事として、花郎道精神を生かした弓術大会が開かれたと記されている。また1949年4月25日の京郷新聞には我が民族精神精華の最高とも言える花郎道の遺跡が発見されたと報じる記事があり、同新聞の1955年10月12日の記事である「任務と責任の完遂 全国カトリック学生大会一周年を迎えて」には、新羅時代の指導理念であった花郎道についての生活様式の1つであった「相磨以道義」が要請される時であると記されるなど、花郎道は民族精神を表わす慣用表現として韓国社会に用いられた。

教育の場面において花郎道を流用したのは半官半民団体であった。1961年3月25日(京郷新聞)には、国道宣揚会主催で学生や一般市民向きに「詩懸賞募集」が行われた。その時の詩題が、「花

郎道・無窮花・建設」となっており、それは韓国政府が目指した国民精神を鼓吹させるものであった。1966年(9月6日京郷新聞)には小学校に「新花郎団」という組織が作られた。これは「私と家庭、国家と人類の幸福と繁栄のために、心身を磨き奉仕犠牲をもって、一層正しく明るい社会をつくる」ことを宣言し、「花郎道の五戒と独立自尊、共同団結、創造向上」を生活綱領として主に奉仕活動を行った。だが、それだけにとどまらず韓国の歴史文化に対する講演の聴取、野営訓練を行って国を愛する心を養う、光復日(独立日)には国旗を配るなど、新花郎団の活動は政府が目指した国を愛する国民精神を蓄えた人間づくりを実現するものであった。さらに陸軍士官学校と姉妹結縁を結ぶことで、子供たちに国家と軍隊の関係を一層緊密に理解させて、軍人による護国精神を養わせる狙いも含まれていたと考えられる。こうして花郎道は教育場面に浸透することで、国民文化としての地位を形成していくのである。

こうした“花郎・花郎道”の存在は、後の朴正熙政権にもつながり国民精神の表象となった。対外的に敵国として北朝鮮と対置している状況と対内的に目指していた経済的自立は、国家の危機として国民に危機感をもたらすこととなり、そこで花郎道は反共産主義の実現とともに国家を強くさせる一致団結の救国の精神として用いられる。当時つくられた陸軍士官学校「花郎台」、花郎勲章、花郎部隊、花郎教育院はこうした韓国政府の政策を表わすものである。こうした政府による“花郎・花郎道”の利用は、戦前の反日主義者たちが用いた花郎の意義と合致しているのである。そのため、“花郎・花郎道”は新政権における国民統合を円滑にする精神文化たりえたのだと考えられる。

2) 花郎の体育・スポーツ的展開

—柔道・サッカー—

韓国新政府における花郎あるいは花郎道の利用

は体育・スポーツにまで及んだ。

まず、1949年12月21日京郷新聞の「柔道4段級も驚嘆 高麗朝技能術再現」という記事に、「高麗時代の武術技能術をもった花郎がいて……この技能術は我が国で一番立派な花郎道である」と、独立後早くも体育・スポーツと花郎道を結びつける記事が現われた。

そして、同紙1954年11月18日の記事には「我が国体育の歴史的考察」の題名で、韓国の体育活動は軍事訓練と相応するものが多く、花郎が行った武士練成訓練活動を一種の体育活動として理解した。また、同紙1956年2月23日の「韓国体育の当面課題上」で、「運動精神は美しい道徳性に基盤を置いているため、運動精神は新羅の花郎精神または西洋の騎士道精神また紳士道精神と相通するものである理解されている。故に体育運動の実施にあたり、どのような場合でも運動精神を喪失してはならない」と、花郎精神、運動精神、西洋の騎士道・紳士道精神の同一性を主張した。また、1961年に開かれた第42回全国体育大会に関する京郷新聞の10月11日付の記事には「民族魂と技巧を発揮せよ」とし、体育は競技勝負より、公正なスポーツマンシップを昂揚するのが目的であるが、成績が低調すると民族精神の高揚も期待できないことを指摘し、全国体育大会は現在韓国スポーツ隆盛の基盤であるのみならず、新鋭花郎精神の現代的表現であると記した。

こうした体育・スポーツにおける花郎道の流用が、政府と関係をもって進められたことは、当時大統領であった朴正熙の話からも確認できる。1962年4月23日の京郷新聞には、「文化祭と共に花郎精神を受け継ぐ武術大会を設けなさい」という記事に「最高会議の朴議長（朴正熙：著者）は22日に呉公報部長官と朴慶北知事に、新羅は歴史的に花郎道なくては考えられないので、毎年文化祭と共に武術大会を開きなさい」と言ったことが記されていた。これは朴政権も前政権と同

様に花郎道を我が国の精神文化として流用していたことを示し、それを文化活動にからめて広める発想があったことがうかがえる。

朴大統領が花郎道を体育・スポーツの精神文化として用いている視点は、1966年10月10日（京郷新聞）の全国体育大会に対する祝詞で一層明確になる。

「民族の気象である花郎精神をよみ返らせ、毎年行われている『体育の饗宴』が、回を繰り返すたびにその記録が上昇し、規模や国民の体育熱も目覚しく向上を繰り返されていることは、体育韓国の未来のために鼓舞的なことである。

体育は国力伸張の不可欠な基礎のみならず、各国の間の理解と親善を深める最善の道でもある。強靱な体力こそ国力である。われは健全な国民体力と民族精神のために体育崇尚の気風振作と発展に全力をつくし、国力の伸張と国威の宣揚のためにより強く精進するべきである。

政府はこれまでより強力な体育の育成策を積極的に施行してきた。国民体育振興法の改正公表による諸施設の拡充と与件の改善を断行することによって、擧族的な体育発展の道を推進してきたのである。だが、体育韓国の真の榮譽のためには体育人の一大奮発と決意はもちろん汎国民的な努力と協調がなによりも重要である。

『若さと美』を表すこの『民族の饗宴』を通して、我々は『個人より民族』、『集団より国家』のために貢献できる奉公の精神を養うべきである。真の勇氣と寛容の美德、団結と協同の精神を学ぶのである。そのためには何よりも体育活動がすべての国民生活の内面に深く浸透され、体育が大衆化と生活化することである。

願いものは体育人と選手一人一人の動きが、民族全体の栄光と名誉に直結していることを心に刻み、今日の若さの饗宴が民族の発展に新しい転機になれるように善戦善闘することである。

皆さんは何日間行われるこの大会を通して、『勝利より姿勢』、『技術より精神』を尊重する『フェ

アープレー』の極致を見せるべきである。こうした精神のもとで、全体育人と選手皆さんが、一心に努力すれば大会に良い記録と優秀な選手発掘はもちろん郷土間の親睦と理解、文化交流にも少なくない貢献する意味深い行事になる。

この意味深い『民族の力と美の祭典』で新しい記録が続出することを国民の皆さんと期待しながら、『発展する韓国』の今日と明日に皆さんとする民族の力が大きく寄与することを祝福する³⁸⁾

民族気象である花郎道をよみ返らせて大会成功に導くべきであり、体育は国力伸長の基礎として、健全な国民体力と民族精神のために体育崇尚の気風と発展に全力を尽くすべきと述べ、花郎精神を民族精神として体育・スポーツと結びつける姿勢をより明瞭にした。

さらに、花郎道は大人のみならず学生層にも強調され、1970年5月23日（東亜日報）に全国大学教練実技大会で、朴大統領は「学問と武芸を練磨しながら集団訓練で力を養った花郎精神を見習い、統一韓国の新しい歴史を開拓する際に、青年学徒らが大きい力を発揮すべきである」といい、同紙1972年6月16日による第1回少年体育全国大会で大会委員長であった金澤壽は、「民族の希望であり美しい花であるスポーツ少年団は、花郎精神を賢く受け止め、国を発展させて、民族の念願である統一を成し、大きな力を養って新歴史の創造に貢献すべきである」と述べ、「花郎精神」を国民意識と化して国民に伝えていた。

具体的な体育・スポーツ種目においては、柔道が花郎道を積極的に取り入れ自国文化としての正統性を主張した。1955年6月18日の京郷新聞には韓国柔道団がヨーロッパへ招待されたことの記念として「柔道使節団派欧の意義」という記事が掲載された。これには「我らの柔道は360余年前、壬申倭乱（日本名：文禄の乱、著者）の時に日本に移植され、日本人の努力によって近代体育とし

て体系化されたが、我らは民族の伝統と先民血汗の体臭が生々しい韓国武術として発展し、民族的尚武精神を正當的に受けついだ民族体育である」。そして、日本の柔道と比べて「韓国柔道は、技術面より精神面すなわち文化的理解と人間性の交流を促求する意義と目的がある。我らの伝統的尚武精神は真勇・礼讓・正義・忠孝親交を基本理念とし、この武士道の五徳を遺憾なく発揮して継承発展させたのが花郎徒である」と記した。

京郷新聞が主張した花郎を媒介とする「民族体育」としての柔道は、1955年に創られたテコンドーと関係があると考えられる。従来空手から始まったテコンドーは、独立後日本の残存文化である弱点から脱皮し、韓国のオリジナリティを主張するために空手に工夫を加え、新たにテコンドーとなった³⁹⁾。これをきっかけに日本由来であった柔道もテコンドーと同様な危機感を抱き、韓国社会にその正統性を求めるために、柔道の韓国由来説を始め、柔道の精神を「花郎道」に結びつけたと考えられる。また京郷新聞1958年11月18日の記事では、柔道精神を直接に花郎に求めており、「柔道の魂を国民へ」で、「私は柔道試合で不祥事が起きないのは先輩審判に対する選手たちの絶対的服従の伝統、そして柔道は他の運動とは異なり、力の技より東洋文化の深奥を胎盤とした謙讓と忍耐を美德として発展したものであるからである……韓国で成長した柔術を日本人が現代運動として体系化した、韓国人に一番適切である……花郎精神と言うものは柔道の魂とほぼ一致する」ものであると述べた。

さらに花郎は対外的に韓国のナショナルアイデンティティを表わす表現として用いられた。1970年代に韓国のサッカーナショナルチームは結成され、その名を「花郎サッカー団」（1部）と称した（2部は忠武）。これは従来国内の体育のみで引用された花郎に対して、国際社会に向けてのナショナルチーム名にしたのは韓国アイデンティティ

の表明であり、花郎精神を受けついでとする自分たちの正統性と自負心を表現したものであったと考えられる。花郎チームは80年代の半ばまで維持され、ワールドカップやアジア大会にも出場した。

また、ナショナルアイデンティティを担う選手にも花郎精神は精神的主体として表われ、1973年の11月9日の京郷新聞に、ワールドカップアジア予選オーストラリア戦を目前において、「もっぱら我々の主武器は粘り強い団結力と強鉄のような闘志、そして臨戦無退の『花郎の精神』それである」という記事が載せられている。

こうしてサッカーにおける花郎の流用は、花郎チームがなくなった後にも、チーム名を花郎とする民間のサッカーチームは増大し、今日まで伝わっている。例えば、花郎サッカーチームは韓国国内にも30余りあり、海外のフランス、アメリカ、オーストラリアでも花郎サッカーチームが結成され活動している。

このように植民地期に創られ、韓民族のアイデンティティを表わすものとして用いられた花郎道は、独立後体育・スポーツ場面においても民族精神の発露とする体育精神と附合するものとして、韓国社会により強く根を張るものであった。

まとめ

「花郎」とはそもそも古くは新羅時代より用いられる言葉であり、「勇猛果敢な」武士集団やその行動を指し、その後も朝鮮半島における勇敢な若者や彼らの活躍を表わす言葉として定着し誉れ高き形容として人々に用いられてきた。大日本帝国政府は朝鮮半島の植民地支配にあたり、さまざまな施策を実施する中で、花郎という表現を巧みに利用し、朝鮮民族の効果的な支配を目論むこととなる。彼らは「花郎道」という言葉を創出したのであった。花郎道とは花郎+道の造語であり、

朝鮮半島における花郎に、日本固有の精神修養の意味である「道」を付加したものである。彼らはこの言葉を巧みに用いながら朝鮮人達の誇りを前面に出し彼らを扇動しながら、日本人への同化のプロセスを進めていたのである。一方で非常に興味深い点として支配側である日本側が創出し、用いた「花郎道」という言葉を帝国主義に抵抗する朝鮮民族の人々も用いていたことである。

こうして一方的な力関係の中で使われるはずであった花郎道は、日本側とは異なった意味合いで反日の朝鮮側でも使われ、花郎道は朝鮮民族の民族精神の支柱となり、日本への対抗意識を示す言葉として流用された。

日本植民地統治終了後の韓国は第二次世界大戦を経て東西冷戦へと向かう世界情勢の中で唯一戦争が継続した状態にある国家として緊張状態の継続を余儀なくされていた。国民は常に国防の最前線で活躍することが期待されており、国家としても平和な国家建設と共に軍人の養成がその最重要課題として存在していたのである。韓国軍の中では花郎道という日本出自の軍国主義的な概念を広く利用したことは本論で論証したとおりである。その際には花郎道のみならず、花郎、花郎徒、花郎精神など「花郎」を用いた慣用表現も同様の意味で用いられていた。学校教育の場面においても花郎道という言葉をとくみに用い、すでに軍役に向かう若者の精神性をコントロールしていた可能性も否定できないであろう。体育は国民の健康を維持・増進するという建前の下に広く受け入れられたが、その目的は国を守る軍隊の規律訓練や体力増強にあったことは、過去の歴史からも容易に理解できよう。その結果、独立後に日本の植民地残存文化が強制的に取り除かれる中で、花郎道は日本との関係を取り除かれ韓国固有の精神文化として主張されることとなる。その後花郎道は韓民族の精神文化の規定を支える重要な文化として大いに利用されるにいたった。そして花郎道は柔

道を韓国文化へと捉えなおす契機として、あるいはサッカーの国際試合において対外的なナショナルアイデンティティを表象するために大いに利用された。今後は、こうしたスポーツ場面における花郎道の運用がいかになされたのかを厳密に検討することが課題となるだろう。

【注および引用文献】

- 1) 国立国語院 http://stdweb2.korean.go.kr/search/List_dic.jsp. 2011年4月25日.
- 2) 以下の花郎の研究は、近年の花郎研究であり、他の研究に多く引用されたため韓国学術誌引用索引 (KCI) に掲載されたものである。本論で中心的関心事としてあつかう花郎道の体育・スポーツにおける利用に関しては、焦眉の課題となっていない。

Lee, Gi-Dong (1979) 「新羅花郎徒の社会的考察」『歴史学報』第82巻, pp.1~38.

李鎮洙 (1986) 「身体文化的要素が花郎の成立に及ぼした影響について」『石堂論叢』第11巻, pp.143~159.

李道学 (1990) 「新羅花郎徒の起源と展開過程」『精神文化研究』第13巻 第1号, pp.3~16.

金正珣 (1990) 「花郎道と世俗五戒」『精神文化研究』第13巻 第1号, pp.37~53.

Jang, dae-jung・Ju, Dong-Jin・Kim, Dong-Gyu (2001) 「花郎徒体育思想の現代的意義」『韓国体育哲学会誌』第9巻 第1号, pp.129~144.

Im, Tae-Pyeong (2001) 「三国史記における新羅花郎道、その精神と教育」『教育哲学』第19巻, pp.105~128.

梁槿錫 (2002) 「花郎徒の倫理思想」『倫理研究』第50号, pp.67~88.

Oh, Dong-Seop・Kim, Bok-Hui・Jeong, Gyeong-Suk (2002) 「花郎道の身体修練に現れる儒・佛・仙思想」『体育史学会誌』第10巻, pp.93~111.

Kim, Sang-yong・Kim, Tae-Hyeong (2005) 「花郎道の体育活動と体育史的意義」『韓国初等体育学会誌』第11巻 第1号, p.114.

全徳在 (2005) 「新羅花郎徒の武芸と手搏」『韓国古代史研究』第38巻, pp.135~170.

Lee, Jeong-Hak (2005) 「体育哲学：花郎徒の体育教育思想に関する研究」『韓国体育哲学会誌』第13巻第1号, pp.113~123.

Kim, Sang-yong (2007) 「花郎道の身体観と身体活動」『韓国初等体育学会誌』第13巻第1号, pp.29~36.

朴南守 (2008) 「新羅中古期花郎の出身家系と花郎徒運営の変化」『韓国古代史研究』第51巻 第1号, pp.123~157.
- 3) 崔在穆 (2009) 「韓国における武の精神・武士道の誕生—花郎と武士道との結び付きへの批判的省察」『韓国陽明学会論文集』第22号, pp.313~358.
- 4) 金富軾 (1145) 『三国史記』。高麗17代王、仁宗の命によって編纂した歴史書。三国時代(高句麗, 百濟, 新羅)から統一新羅までの歴史を書いたもので、全50巻に構成されている。
- 5) 翻訳文: 井上秀雄訳 (1980) 『三国史記1』平凡社,

pp.110~111.

「三十七年（五七六）春、むかし源花を奉じていた。（その理由は）君臣が（有能な）人材を見つけ出せなくて困っていた。（そこで）多くの人を集めて自由に交流させ、それぞれの品行や道義を観察し、その後（有能な人材を）登用した。やがて、美女二人——人を南毛、他を俊貞という一を選び出し、それぞれのもとに三百余人の仲間が集まった。この二人の美女は互いにあでやかさを競い、相手を妬んでいた。（あるとき）俊貞が南毛を自分の家に呼びよせて、酒を無理やりに飲ませて酔わせ、引きずってゆき、河に投げこんで殺してしまった。（やがてこのことが発覚して）俊貞は誅殺された。（そのため）仲間たちも（中心人物がいなくなって、）仲間意識がなくなり、散り散りになった。その後あらためて美貌の男子を選び出し、これに化粧させ、美しく装わせて、花郎と名づけ、それを（多くの若者が）奉じた。その仲間たちが雲のように多く集まり、ある者は互いに道義を磨き、ある者は互いに歌楽を悦しみ、山地や水辺をめぐり歩いて、どんな遠いところへでも出かけていった。このような交際の中で、互いにそれぞれ人の良し悪しがわかり、その中で良いものを選んで、これを朝廷に推薦した。……それゆえ、金大門の『花郎世紀』には、賢明な補佐官や忠義な家臣が、それによっていっそう秀れたものになり、秀たれ士官や勇敢な兵士が、このことによって生みだされてきた。といい、崔致遠の「鸞郎碑」の序文では、国に玄妙の道があつて、それは風流という……また唐の令狐澄が著した『新羅国記』に次のようにいつている。貴人の子弟で美貌なものを選んで、白粉をつけて化粧し、美しく装わせる。これを花郎といい、国人はみなこれを尊び仕えている」

- 6) ①翻訳文：井上秀雄・鄭早苗訳（1988）『三国史記4』平凡社、pp.5-8。
『三国史記』巻41 列伝1 金庾信 上
「庾信）公は十五歳のとき花郎となった。当時の人々は多くつきしたが、龍華香徒といった。……馬に乗り、剣を抜いて、溝を跳びこえ、賊陣に出入りして、將軍を斬り、その首をさげて帰ってきた」
②翻訳文：井上秀雄・鄭早苗訳（1988）同上書、pp.86-88。
『三国史記』巻44 列伝4 斯多含
「斯多含はその系統は真骨より出て、奈密王七代の孫にあたる。……元來門地の高い高貴の家柄である。（上に）、品性は清潔ですぐれ、その志気も方正であった。その当時の人々は、（含を）花郎に奉じたいと願ったので、やむをえず花郎となることを引き受けた。……（斯多）含は、はじめ武官郎と死友（友情といふちをかける友人）の約束をしていた。武官（郎）が病

気で死ぬと、（斯多含は）慟哭のあまり、七日後には（自分も）また死んでしまった。時に年は十七歳であった」

- ③翻訳文：井上秀雄・鄭早苗訳（1988）同書、pp.157-159。
『三国史記』巻47 列伝7 金令胤
「欽春角干は、真平王の時に花郎となり、仁徳が深く信義が厚だったので、よく人々の心をとらえていた。……欽春はその子の盤屈を呼んで、臣下として忠義に勝るものはなく、子として孝に勝るものはない。危機を見て命を投げ出すのは忠孝共に全うすることであると云った。盤屈はそのとおりですと答えて、賊の陣に入り、力戦して死んだ」
④翻訳文：井上秀雄・鄭早苗訳（1988）同書、pp.159-160。
『三国史記』巻47 列伝7 官昌
「官昌は新羅の將軍品日の子供である。外見は優雅で少くして花郎となり、人とよく交際した。十六歳で騎馬や弓射をよくしたので、……黄山の野で兩軍が相対したとき、父の品日が（官昌に）、そなたは少年といえども志気がある。今日こそは功名を立てて富貴をおさめる時である。勇気をもちなさいと言うと、官昌は、わかりましたと答え、ただちに馬に乗って槍を横たえ敵陣を直撃し、馳りながら数人を殺した」
7) 花郎と世俗五戒との関連性については疑問の意見もあり、崔在穆（2009）「韓国における武の精神・武士道の誕生—花郎と武士道との結び付きへの批判的省察」『韓国陽明学会論文集』第22号、p.319。でも、世俗五戒を授かったとされる貴山と箒項が花郎ではないことや花郎と直接関連付ける史料がないことから、「世俗五戒」が花郎の倫理的徳目であったかについては否定的な意見を示している。
8) 弘谷多喜男・広川淑子（1973）「日本統治下の台湾・朝鮮における植民地教育政策の比較史的研究」『北海道大学教育学部紀要』第22号、p.29。
9) 利川ニュース <http://www.2000news.co.kr/news/articleView.html?idxno=7406>, 2011年5月6日。
10) 韓国ブリタニカオンライン「文化政治」
http://preview.britannica.co.kr/bol/topic.asp?article_id=b08m0942a, 2011年5月5日。
11) 利川ニュース 前掲HP。
12) 池内宏（1929）「新羅人の武士精神について」『史学雑誌』第40編 第8号、p.32。
13) 池内宏（1936）「新羅の花郎について」『東洋学報』第24巻 第1号、pp.30-31。
14) 三品彰英（1943）『新羅花郎の研究：三品彰英論文集第六巻』平凡社、p.161。
15) 三品彰英（1943）前掲書、p.162。

- 16) 鮎貝房之進 (1932) 「花郎攷」『雑攷 第4輯』国書刊行会, p.88.
- 17) 鮎貝房之進 (1932) 同上書, p.88.
- 18) 鮎貝房之進 (1932) 同書, pp.93~94.
- 19) 鮎貝房之進 (1932) 同書, pp.94~95.
- 20) 鮎貝房之進 (1932) 同書, p.97.
- 21) 鮎貝房之進 (1932) 同書, pp.97~98.
- 22) 白神壽吉 (1940) 「文教の朝鮮」第174号, pp.20~25.
- 23) 1948年に韓国の新政府は新日協力者を処罰するために「反民族行為処罰法」を制定した。そして、その法を執行する機関として「反民族行為特別調査委員会」が構成された。「反民特委調査記録」は新日協力者らの調査記録である。本稿では国史編纂委員会の韓国史データベース <http://db.history.go.kr> からの資料を引用した。
- 24) 韓国史データベース <http://db.history.go.kr>, 2010年10月2日.
- 25) 韓国史データベース 前掲 HP.
- 26) 韓国史データベース 同 HP.
- 27) 韓国史データベース 同 HP.
- 28) 韓国史データベース 同 HP.
- 29) 韓国史データベース 同 HP.
- 30) 韓国ブリタニカオンライン 「東亜日報」
http://preview.britannica.co.kr/bol/topic.asp?article_id=b05d1521b, 2011年5月7日.
- 31) 被支配側が用いた花郎の新聞や雑誌の記事は、Naver ニュースライブラリ, http://dna.naver.com/search/search_By Date.nhn# と国史編纂委員会韓国史データベース, 前掲 HP に載せられている原本資料を利用した。
- ①歴史的事実に基づいて論じる。
- 1923年10月25日「朝鮮史概講13第1編上古史第8章三国時代の文化, 新羅統一以前」
- 1930年1月21日「朝鮮歴史講話」
- 1932年9月14日「朝鮮史: 眞興王の政治」
- 1936年4月25日「五千年間 朝鮮の魂」
- 1938年2月6日「花郎制度再批判: 古代社会新羅の花郎制度再批判」
- ②歴史にしたがった上, 朝鮮の文化を論じる際に言及。
- 1926年7月20日「壇君論: 朝鮮を中心とした東方文化淵源研究」
- 1928年1月13日「朝鮮文化の一切種子である壇君神典の古義」
- ③花郎を素材にした歴史小説。
- 1929年10月5日「史上のロマンス三国時代編」他
- ④子供を対象にした歴史小説。
- 1931年1月3日「こども朝鮮」
- 1933年9月5日「児童読本: 花郎は何か」
- 1933年9月7日「少年読本」
- ⑤花郎が行った訓練を体育の側面から論じる。
- 1930年4月2日「奇絶壯絶した朝鮮古代の体育」
- ⑥朝鮮人の思想的啓蒙を論じる際に引用する。
- 1932年12月27日「朝鮮民族の指導原理, 家族主義から民族主義へ」
- 32) 二木謙一他 (1998) 『日本史小百科 武道』東京堂出版, p.208.
- 33) 白楽濬 (1933) 「古朝鮮の国風花郎道はなにか」『東光』第40号. 韓国史データベース 前掲 HP, 2010年3月1日.
- 34) 韓国精神文化研究院 (1991) 韓国民族文化大百科事典, p.216.
- 35) 崔在穆 (2009) 前掲書, p.352.
- 36) 金聲振・李圭元 (1948) 『花郎道系統 朝鮮軍事實鑑』大韓兵書出版社.
- 37) 韓ギョレ21 第614号, 2006年6月14日
<http://www.hani.co.kr/section-021037000/2006/06/021037000200606140614068.html>.
- 38) 京郷新聞 1966年10月10日.
- 39) 空手からテコンドーへ展開についてはすでに朴が, 朴周鳳 (2011) 『韓国における伝統武芸の創造』早稲田大学博士學位論文, pp.38~55. で指摘している。